

復活節第四主日 2014.5.11

羊の囲いのたとえ

ヨハネ 10 章 1-10 節

10:1 「はっきり言うておく。羊の囲いに入るのに、門を通らないでほかの所を乗り越えて来る者は、盗人であり、強盗である。

10:2 門から入る者が羊飼いである。

10:3 門番は羊飼いには門を開き、羊はその声を聞き分ける。羊飼いは自分の羊の名を呼んで連れ出す。

10:4 自分の羊をすべて連れ出すと、先頭に立って行く。羊はその声を知っているので、ついて行く。

10:5 しかし、ほかの者には決してついて行かず、逃げ去る。ほかの者たちの声を知らないからである。」

10:6 イエスは、このたとえをファリサイ派の人々に話されたが、彼らはその話が何のことか分からなかった。

10:7 イエスはまた言われた。「はっきり言うておく。わたしは羊の門である。

10:8 わたしより前に来た者は皆、盗人であり、強盗である。しかし、羊は彼らの言うことを聞かなかった。

10:9 わたしは門である。わたしを通って入る者は救われる。その人は、門を出入りして牧草を見つける。

10:10 盗人が来るのは、盗んだり、屠ったり、滅ぼしたりするためにほかならない。わたしが来たのは、羊が命を受けるため、しかも豊かに受けるためである。

説教

<良い牧者の主日>

福音を毎週読み勧めるにあたってどの聖書箇所を読むのかは各教会の考えがあり、福音を自由に選ぶことは主の喜ぶところだと思います。その上で、わ

わたしたちの教会はカトリックの聖書日課に従うことにしています。この日課は3年サイクルになっていて、3年で4つの福音書を読みきるという工夫がされています。実際に使用してみると伝統に鍛えられ、よくできた配分だとおもいます。日課に従わない礼拝説教は牧師の「くせ」とか「好み」で福音が選ばれる危険が常にあります。かたよった福音理解に陥らないためにわたしたちは日課を大切にしていきます。

<直前の箇所>

きょうのテキストはヨハネ福音書にはめずらしいたとえ話です。福音書の「たとえ話」を読むときには「直前の箇所をみる」という原則があります。出来事に対して譬えを用いてかみくだいて説明する、これがイエスの譬えの基本です。だから、譬えだけを読んでいても譬えの真意がわからないということがしばしばあります。

直前のヨハネ9章はどんな出来事があったかという、そこでは「生まれつき目の見えない人のいやし」の奇跡が記されています。イエスによって目が見えるようになった彼は、ファリサイ派の人々の脅迫「**お前は全く罪の中に生まれたのに、我々に教えようというのか**」（ヨハネ9:34）にも屈せず、「あの方は預言者です」と信仰告白し、まことの羊飼いであるイエスの声に聞き従ったというのが大まかなあらすじです。

この「生まれつき目の見えない人のいやし」という出来事を受けて、今、朗読されたヨハネ10章に入るわけです。ヨハネ9章でファリサイ派は目が見えるようになった人に「お前は、あの人をどう思うか」と追求しました。イエスに直接尋ねるべき質問なのに、目が見えるようになった人を脅したので、そこでイエスは「羊の囲い」のたとえ「羊の門」のたとえを通して、ご自分がだれであるか、ファリサイ派に答えようとしたのです。

<その話が何のことだか分からなかった>

「羊の囲い」のたとえの中で、ファリサイ派は「門を通らないでほかの所を

乗り越えて来る盗人や強盗」と厳しい指摘を浴びていることにまったく気付きません。自分たちは律法に明るく、一般民衆の上に立つ教師であると思いがあっていて、羊である一般民衆に害を加えている盗人、強盗だとは露ほども思っていない、上に立つ者たち、彼らの傲慢があらわになっています。福音はこのように記しています。

彼らはその話が何のことか分からなかった (10:6b)

きょうの復活節第四主日は「良い牧者の主日」とも呼ばれます。なかなか”からし”の利いたいい副題だと思います。ここで説教者はファリサイ派の愚かさを語りだしたら福音の半分もわかっていません。このことに副題を見ておそまきながらわたしも気づきました。ここで語られるファリサイ派はいまの教会指導者たちでもあるのです。彼らと同じ誤り「何のことが分からない」は、上からの目線、傲慢から生じます。説教者はみことばを語る前に自分自身で受け止めて、十分に反省する必要があります。

わたしは囲いの中に羊を追い立てているだけの羊飼じゃないのか？羊たちを囲いの外の牧草を食べに連れて行っているか。門をちゃんと通って囲いへの出入りをしているか。囲いの外に一步もでない羊飼になっていないか。

(その他いろいろ)

「まさか」自分に限って、というその「まさか」が落とし穴です。門を通過して囲いの中に入る羊飼いに羊は導かれていくのですが、その間に立って邪魔をして、羊が「ほんとうの羊飼」に導かれるのを妨げている部分はないと言い切れる指導者は少ないはずです。

<イエスが来たのは…>

では牧師はどのようにあるべきなのか。イエスのことばに答えがあります。

わたしが来たのは、羊が命を受けるため、しかも豊かに受けるためである (10:10)。

このイエスの言葉に、それぞれの教会の牧師は忠実であるべきです。羊が命を受けるため、しかも豊かに受けるために腐心する牧師こそ、真の牧者ということですが、あってはならないことですが、羊が命を豊かに受けるようにと

心を砕かない牧師は、結局は盗人であり、強盗ということになります。

<羊への呼びかけ>

それでは信者はどのようにすればいいのか。この答えもイエスのことばにあります。

羊はその声を知っているので、ついて行く。しかし、ほかの者には決してついて行かず、逃げ去る。

(10:4-5)

生まれつき目の見えなかった人は、ファリサイ派の人々がどれほど脅しても、イエスへの信仰を曲げようとはしませんでした。羊は羊飼いの声を聞き分けます。これは学歴とか教養とかではない、それらとはまったく別の何か特別な導きです。神はこの聞き分ける力を一人ひとりの人間に与えておられます。どうか皆さんが、「わたしが耳を澄ませば、ついて行く方向は必ず示してもらえる」と信じていただきたいと思います。神はあなたがたに「まことの羊飼いについて行く力」を今日も注いでいます。